

吉岡弥生賞受賞者

(出身校)

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
1	昭 43	森川みどり (東女医大)	女医の地位向上、後輩の育成、愛知支部無料健康相談等の実績に対して。		
		牧野夫佐子 (関西医大)	病院ボランティア運動の推薦者として。		
		龍 知恵子他 (東邦大医)	幼少脳性マヒ児療育施設及び研究に対して。		
2	昭 44			岡本 歌子 (東女医大)	線維素溶解現象の生理学的研究。
				添田 百枝 (東邦大医)	トリコマイシンの製造法ならびにマリナマイシンの発見と開発。
				荒木 寿枝 (岡山大医)	光線過敏症の基礎ならびに臨床的研究。
3	昭 45	岸 直枝 (東邦大医)	精薄幼児の収容施設、渡来瀬養護園を独立で創設し、学齢前の児童養護教育を行っている業績に対して。	野呂 幸枝 (関西医大)	母校病院内に独自の未熟児センターを設置し、その主宰者として管理指導にあたり、さらに退院者について長期の追跡調査を行うなどの業績に対して。
		川田 仁子 (東女医大)	20 有余年にわたる精薄養護ならびにその教育に従事した業績に対して。		
4	昭 46	林 富美子 (東女医大)	長年癩療養所に勤務、癩医療のため献身的活動に従事し、その社会的功績は高く評価されている。	藤井 儔子 (東女医大)	薬理学者として 20 年の長きにわたり、ホルモンの問題、特に性腺を中心とする研究に対して。
5	昭 47	阿部 秀世 (東女医大)	戦後の混乱時代に私費を投じ、育秀会乳児園を設立され、恵まれない乳児のために多年にわたり日夜専念された。	河野 林 (東邦大医)	長い間病理学の研究に専念され、特に外傷により神経系血管障害についての業績。
		野呂 たじ (東女医大)	多年にわたり地域医療に尽力されると共に、私費をもって愛児園を創設し、さらに幼稚園を開設されるなど、多年にわたり幼児教育のため専念された。	鮫島 美子 (関西医大)	内科学、特に消化器癌の酸素診断と薬物による肝障害の酸素診断についての業績。
6	昭 48	石橋 志う (東女医大)	第二次大戦後の混乱期に婦人の厚生、未亡人のための保育所、乳児院、養護施設など創立された。	堀口 文 (東女医大)	多年にわたり産婦人科領域の研究に没頭し、成果をあげられた。特に血液型不適合の問題に早くより着目し、これを産婦人科領域に応用された。「不適合妊娠の研究」は、学会において高く評価されている。
7	昭 49	名和 千嘉 (東女医大)	長年月にわたり、癩の研究と治療に従事され、献身的に尽力された。	大森 安恵 (東女医大)	長年にわたり糖尿病の臨床的研究に専念され、数多くの業績をあげられた。殊に「妊娠と糖尿病」についての研究は、学会において高く評価されている。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
8	昭50	新井 タネ (東女医大)	30年余りの長きにわたり、へき地診療に従事され、医療面のみならず広くその地域の指導的役割を果たされた。	藪内 英子 (関西医大)	多年にわたり微生物学の研究に専念され、多くの業績をあげられた。殊に緑膿菌についての研究は、学会において高く評価されている。
9	昭51	肥塚 典子 (関西医大)	母と子を守る会「ふたば会」の指導者として、地域保健のため活躍され、女医の本分を十分発揮された。	関 敦子 (東女医大)	消化管ホルモン、殊にガストリン分泌について、幾多の業績を発表。特に「消化液分泌における自律神経と消化管ホルモンの協働」の研究は学会から高く評価されている。
		近藤 み弥 (出身校不明)	保育園を設立され、川崎市児童福祉事業の草分けとして、この仕事に専念された。	濱田 雅 (東邦大医)	抗生物質の研究一筋に打ち込まれ、幾多の新抗生物質を発見。特に、「カスガマイシン」は稲の「いもち病」の特効剤として広く用いられ、高く評価されている。
10	昭52	高木 松江 (東女医大)	昭和43年より、めだか学園のちにさざれ学園を開設され、心身障害児のためその生活訓練、音楽訓練等を行い、昭和50年私財を投じ、地域の心身障害児に対しても大きな力を与えた。	五島瑳智子 (東女医大)	微生物学の分野において研鑽され、多くのすぐれた業績を挙げられた。特に緑膿菌及びその類似菌の業績は、内外の学界に高く評価されている。
		松尾 周子 (東邦大医)	社会福祉法人みぎわ学園を開設され、全私財を投じて老人ホームを設立し、老人福祉に専念された。	青山 光子 (名古屋市大医)	長い間公衆衛生学の研究に専念され、数多くの業績をあげられた。特に、衣食住家庭用品などの衛生学的研究「自動車排気ガスの成体に及ぼす影響」の実験など、そのユニークな研究は学会において高く評価されている。
11	昭53			平野 京子 (東女医大)	永年にわたり、皮膚遊出細胞の免疫学的に「皮膚遊出細胞の免疫学的検索」等、「免疫」の分野を広く深く研究、進展させその優れた業績は高く評価されている。
12	昭54				
13	昭55	日野 俊子 (東女医大)	60有余年の永きにわたり、へき地医療に献身され、地域住民の福祉の増進と文化の向上に尽力された。	橋本 葉子 (東女医大)	永年にわたり冷血脊椎動物網膜の生理学的研究に専念され、すぐれた業績を発表され、特に色素電極法や顕微分光光度法を駆使しての研究は学会において高く評価されている。
14	昭56				
15	昭57	福永ひろこ (関西医大)	無医地区であった元箱根に昭和19年以来、地域医療に貢献しその功績が大であった。	串田つゆ香 (東女医大)	光学顕微鏡と電子顕微鏡との研究を密接にさせるすぐれた方法、即ちGMA-Quetol523包埋法を考案した。
				杉山太規子 (名古屋市大医)	マイコプラズマ及びノートバイオロジーに関し、幾多の研究成果をあげている。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
16	昭 58	佐伯 輝子 (東邦大医)	昭和 54 年以来横浜市寿町診療所に勤務し、心身ともに荒廃した人々の診療にあたった。		
17	昭 59	松山 京子 (関西医大)	保健所勤務の経験と臨床医として地域に直結した保健衛生指導とその普及、教育に尽力された。		
		若林 静子 (東女医大)	開業医として横浜市山下町中華街で中国人を診療し、日中友好の実をあげられた一方、母子福祉連絡協議会会長として地域医療に貢献された。		
18	昭 60	三神 美和 (東女医大)	昭和 43 年より 18 年間の永きにわたり社団法人日本女医会会長の要職を果しその間本会の社団法人の認可、大阪万国博会期中救急医療奉仕、国際女医会会議を東京に招致、国際交流基金設定、研究助成制度を設け、加えて会館建設、荻野吟子賞設定など卓越した能力と優れた指導力に対して授与された。		
19	昭 61	荷見ヒサ子 (東女医大)	早期に社会福祉事業に着目し昭和 46 年に社会福祉法人特別養護老人ホーム「西山苑」を設立。おって保育園を設立し、老人看護には極めてユニークな運営をし、地域社会に貢献した。		
20	昭 62	長池 博子 (東女医大)	長池優生保護相談所を開設。思春期相談に情熱を傾け、母性健康管理並びに性教育の指導に尽力された。	平敷 淳子 (東女医大)	早くから画像診断学を提唱され総合画像処理システムの開発とその実用化に努力を続けられその成果は高く評価されており、また WHO 専門委員会のメンバーとして国際的にも活躍が期待されている。
21	昭 63	今 鸞子 (東女医大)	小児科医として終世地域医療活動に尽くされ、早くから婦人教育の健康教育を推進、率先し、その指導に当たられ、また昭和 24 年当会の北海道支部を設立、無医地区の診療奉仕活動、並びに広く社会的活動をすすめる地域に貢献された。	竹宮 敏子 (東女医大)	自律神経機能障害の臨床、特に血管運動神経調節障害の臨床生理学的研究において業績を挙げられ、国内外学会における活躍と共に、後輩の指導にも尽力された。
22	平 1	丸木 希代 (東女医大)	心身障害児者福祉増進に献身的努力をされ、アジア諸国との医学交流、並びに医師看護婦を招聘しその教育、研修に尽力された。	早川 律子 (名大医)	国の内外学会に数多くの論文を発表され顕著な業績をあげられ、特に接触皮膚炎の領域における知見はほかに追随を許さぬ研究として高い評価を受けている。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
23	平2	保坂 智子 (名古屋市大医)	永年にわたり小児科医、特に女医としての観点から病児保育の必要性に着眼、幾多の困難を克服してその実現を図り、鋭意活動してこられた。これは、病児の健康管理のみならず、現社会に於ける女性の社会的進出にも寄与した活動と評価、授与された。	野本 照子 (東女医大)	医学部卒業当初より、薬理学を専攻、以来その多数の業績は国内外学会に於いて高い評価を得ると共に薬理学教授として医学教育に貢献、且、各学会の評議員として学術振興に多大な寄与をされている。
24	平3	高柳 泰世 (名大医)	学校医として長年にわたり学校保健衛生に関する研究を続け学校保健に多大の寄与をされた。また、色覚異常に関する研究を通し色覚異常者の社会生活の改善に推進、貢献された。	稲垣千代子 (京大医)	薬理学の分野に於いて数多くの顕著な業績を挙げられ国内外における高い評価と栄誉を受けられる。また薬理学教授として学生の指導にあたられ医学教育に貢献、学術振興に多大の寄与をされた。
25	平4	倉島 摂子 (東邦大医)	長年にわたり脳性麻痺児を守る会の理事としてその療育施設東京小児療育病院及びみどり愛育園の診療及び運営に没頭され、今日まで多端な活動を続けて来て居られる。日夜多くの患児およびその家族の支えとなり、又困難な福祉施設の経営をより強固に発展させて来られた功績は高く評価されている。		
26	平5			加藤 庸子 (愛知医大)	脳神経外科専門医として研鑽を重ねると共に教育、診療にも携わり臨床、研究、両面においてめざましい業績を挙げている。尚、平成3年には日本脳神経外科女医会を結成され米国脳神経外科女医会とも積極的に交流を図っている。学術面における研鑽、交流、女医の地位向上につとめると共に後輩女医の指導など、その幅広い活動に対し高く評価されている。
				横山 和子 (東女医大)	一貫し手麻酔の研究、教育、診療に携わり、臨床面はもとより研究面においても輝かしい業績を挙げ、麻酔科専門医として国内・国外の多数の学会に於いて高い評価を得ている。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
27	平6	山崎 倫子 (東女医大)	昭和 18 年東京女子医学専門学校を卒業、戦後混乱の外地に於いて死を賭して住民の医療に尽力された。昭和 42 年日本女医会役員に就任、会長職を経て 30 年の長きに亘り卓越した指導力を発揮、国際女医会東京会議、西太平洋地域会議を成功に導いた。日本女医会の法人格取得に対する功績は特筆されるものである。女性社会の指導者としての活躍は多方面にわたり、高齢化問題に対する実践活動は高い評価を受けている。	水田 祥代 (九州大医)	昭和 41 年九州大学医学部を卒業後、平成元年旧帝国大学医学部に於ける初の女性教授として就任、その間一貫して小児外科の診療、研究に専従され特に新生児外科領域に於ける輸液栄養管理並びに胎児外科の研究の多くの業績は学会の高い評価と多大の期待を受けられている。また、後輩女医に対し積極的な指導にあたられ、高次元の見識と包容力は万人の信頼と敬愛を受け師表と目されている。
28	平7			澤口 彰子 (東女医大)	昭和 42 年東京女子医科大学大学院を修了、社会医学系博士号を取得後、一貫して法医学の分野を歩み、現在は東京女子医科大学・法医学教室の主任教授として「DNA 分析の法医診断学的応用」を研究の中心課題として活躍の傍ら、東京都監察医務院非常勤監察医、警視庁刑事部鑑識課嘱託医として東京 23 区域司法解剖鑑定人としても活躍し、国内・国外の学会から高い評価を得ている。
29	平8	群馬県 母乳育児を 広める会	女性医師の視点に立地、全国的規模による母親への啓蒙活動を推進すると共に研究発表を通じ問題提起を続けている。	内潟 安子 (金沢大医)	昭和 56 年金沢大学医学部大学院を卒業後、一貫して糖尿病を中心とする自己免疫病、特にインスリン自己免疫症候群の発症機序の解明に数々の業績を挙げられ、国内・国外の学会から高い評価を受けている。
30	平9	佐藤 秩子 (名古屋市大医)	医学部卒業以来 45 年にわたり、細胞の老化及び老化の環境について研究を積み重ね高齢化社会の中で高齢者自身が長命をどのように受け止め今後の生活に如何に価値付けるかなど科学的分析のみならず社会に向けての啓蒙活動を行った。	斎藤加代子 (東女医大)	1980 年東京女子医科大学大学院を卒業後、一貫して分子遺伝学の臨床および神経筋疾患の基礎研究と臨床に関して研鑽を積み、国内・国外の学会から高い評価を受けている。特に筋ジストロフィーに関する遺伝子診断は厚生省の高度先進医療として認められている。
31	平10	久保田くら (東女医大)	1981 年に社団法人至誠会理事長に就任され保育園の運営に携わり、働く女性の保育環境設備に力を注いだ。1991 年には午後 7 時まで、1993 年には午後 10 時までの延長保育を実施し、特に女性研究者の研究活動に大いに寄与した。	宮川 幸子 (大阪大医)	1966 年大阪大学医学部を卒業後、一貫して難病である膠原病や新生児エリテマトーデス等の皮膚科領域並びに臓器障害の研究に従事し多大な業績を挙げた。特に新生児エリテマトーデスの心ブロック予知の可能性に発展する研究として期待される。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
32	平11	橋本美知子 (関西医大)	医学部卒業後、四十数年間、公衆衛生学の研究・教育を通して、高齢者福祉・介護の先駆者の指導者として活躍し、更に衛生行政や市民の保健啓蒙に多大の貢献をした。	山本 纘子 (名大医)	医学部卒業後、脊髄小脳変性症な神経内科学の研鑽を積み、異常眼球運動の定量化の方法を確立し、治療薬の薬効の評価を可能にした。更に、脳神経障害時の画像解析、特に眼球運動の機能的MRIの計画など、病態解析に多大な貢献をした。
33	平12			大原 一枝 (関西医大)	皮膚科学を専攻し、1936年の化粧品による皮膚障害のパッチテストによる報告は皮膚障害のパッチテストの嚆矢であり、カンジダ性肉芽腫も本邦初症例を報告された。また日和見感染という訳語を一般に広められた功績も大である。国際女医会50年会員としても表彰されており女性医師の社会的地位の向上にも貢献をした。
33	平12			大澤真木子 (東女医大)	小児神経学の研鑽を積み特に福山型筋ジストロフィーが常染色体劣勢遺伝により事を明らかにし、同疾患が常染色体9番長腕31にあるフクチン遺伝子の異常によるという発見の基盤を作った。その一方詳細な臨床的観察に基づき患者の突然死の防止にも寄与された。
34	平13	関根 みよ (東邦大医)	昭和61年より平成8年まで10年間に亘り日本女医会埼玉支部長として会員増強に尽力、学術講演や懇親会を開催して支部の活性化を図り、また日本医師会支部役員との交流を深めるなど支部の復興に努力し日本女医会の活動に多大な貢献をした。		
35	平14			安達恵美子 (千葉大医)	眼科学の教育研究診療に従事し、平成5年の第31回国際臨床視覚電気生理学会の会長を初め、日本神経眼科学会会長、日本眼科学会総会会長 日本学術会議感覚器医学研究連絡委員などの重責を果たし、医学の発展に寄与した。さらに千葉県アイバンクの理事として積極的に一般市民への講演活動を行い、アイバンク事務局を大学内に設置し、県民・市民の健康福祉に多大なる貢献をした。
36	平15		該当者なし		該当者なし

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
37	平16	津田 喬子 (名古屋市大医)	麻酔科学を中心に集中治療医学、救急医療、ペインクリニックなど学術および社会活動を活発に展開し、特に、麻酔科医の立場から救命救急士の育成、一般市民への救急蘇生法の普及、痛みを理解に関する啓発活動や、女性医師を取り巻く諸問題に関する積極的な取り組みなど、広く社会に貢献している	高原 照美 (阪大医)	肝炎発症機序の免疫学的解析、肝硬変の進展機序に関する研究、肝硬変における抗線維化遺伝子治療、肝再生医療の構築など肝臓病の研究に功績を挙げた。その間、海外での活躍もはなばなしく、国内でも種々な学会よりの奨励賞を受賞されるなど、医学に多大なる貢献した。
		野澤 良美 (東邦大医)	公衆衛生学を研究、内科医師として地域医療に携わる一方、多くの園医や校医として活躍し、その間に女性の働く環境の支援として特に病児保育の必要性を痛感し、1991年に関東地区・中部地区では第1号である病児保育室を開室した。その後、病児保育研修会における保育士・看護師などの教育活動を初め、病児保育室を国の「乳幼児健康支援一時預かり事業」に位置付ける運動や、全国病児保育協議会の結成に多大なる貢献をした。		
38	平17	松本 文繪 (関西医大)	大阪女子医科大学（現関西医科大学）卒業後産婦人科医師として地域医療に多大の貢献をし、テレビドクターとして昭和38年から3年間、思春期外来、不妊外来、赤ちゃん外来を担当、その後、「幸福な性」「豊かな性」を出版するなど、人間性や母性の在り方を助言・提言し、平成13年には各分野で功績の著しい女性を顕彰する賞である「京都府あけぼの賞」を受賞した。平成14年よりインターネットで「思春期のまっただ中にいる15歳を大切に」というメッセージを送り続け、「莓(15)先生」と敬愛されている。また、スリランカにはバス・救急車・消防車などを寄贈し、更に120名収容可能な子供用教育施設「松本ナーサリースクール」も寄付し、スリランカ保健省より表彰されている。	清水 夏繪 (東京大医)	東京大学医学部を卒業、耳鼻咽喉科学を研修された後、神経内科学を専攻し、アメリカのマウントサイナイ病院へ留学、帰国後は自治医科大学神経内科講師、帝京大学医学部第三内科教授、帝京大学付属市原病院院長を務め、現在は帝京大学名誉教授、客員教授として活躍。この間、一貫して神経疾患に関係ある運動障害、めまい・平衡障害、眼球運動障害、視覚障害の神経生理学的臨床研究に力を注ぎ、沢山の成果を上げた。また、平成16年に開催の第26回国際女医会議ではランチョンセミナー「片頭痛治療の最前線」の講師もし、日本女医会のためにも尽力された。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
		嶋崎紀代子 (東邦大医)	帝国女子医学専門学校(現東邦大学医学部)卒業後、耳鼻咽喉科医師として地域医療に従事される一方、小川正子医師のハンセン病に対する使命感に共感し、日本キリスト教団会員としてハンセン病の診療に貢献した。国内の患者激減後は開業医として活躍、韓国、インドネシアなどのハンセン病撲滅運動に奉仕している。		
39	平18	石原 幸子 (東女医大)	東京女子医専(現東京女子医科大学)を卒業後、同大学の小児科学教室に入局し、東京女子医科大学第二病院小児科開設時の功績により、同門会より奨励賞を受けられた。今なお地域医療に貢献している。 (社)日本女医会に於いては三十年もの長きにわたり、日本女医会理事、同副会長として本会の発展に尽くし、1976年と2004年に東京で開催された国際女医会議には、準備段階から多大な協力をした。現在も子育て支援委員会委員長として活躍している。	湯澤美都子 (日本大医)	日本大学医学部を卒業後、同大学の眼科学教室に入局し研鑽を積み、同大学講師、助教授を経て、教授に就任。 2000年には日本眼科学会学術集会に於いて、宿題報告の重責を女性として初めて果たし、2006年には同学会雑誌の最優秀論文賞も受賞。 現在も黄斑疾患の世界的権威者として、その業績は国際的にも高く評価されている。
39	平18	加藤 竺子 (東邦大医)	帝国女子医専(現東邦大学医学部)を卒業後、九州大学医学部第三内科に入局。その後行政に入り、福岡市保健所長、同衛生局長などの要職を歴任、後女性としては初めての政令指定都市である福岡市助役となり、1期4年を務めた。医師としての広い視野に立ち、衛生、民生、高齢者福祉などの分野で功績を挙げ、その間(社)日本女医会副会長として多くの事業を企画実行、本会の活動に寄与した。		
40	平19	竹内 静香 (関西医大)	大阪女子医科大学を卒業後、日本赤十字福井病院などの勤務を経て、昭和29年に熱海診療所を開設し、以来、半世紀以上に亘りここで診療をし、この間、静岡県女医会会長、日本女医会役員、熱海市医師会副会長、熱海市議会議員、静岡県議会議員などを歴任しつつ、老人・女性・環境問題等に取り組んだ。	伊藤千賀子 (広島大医)	広島大学医学部を卒業後、同大学の内科教室にて研鑽を積み、同大学講師となる。広島原爆被爆者健康管理所勤務の傍ら、経口ブドウ糖負荷試験の経年観察を行い、糖尿病発症とインスリン抵抗性の関与を明らかにした。この研究は日本糖尿病診断基準改変に寄与した。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
		今野 信子 (東女医大)	東京女子医学専門学校を卒業後、日本赤十字大連病院眼科、帰国後に順天堂大学眼科医局を経て四谷新宿眼科、後に、新宿眼科を開業。これまで70年余眼科医として地域医療に多大な貢献をし、その功績に対し文部大臣賞、東京都知事賞を受賞。 これまで日本女医会の発展のために、折に触れ貢献した。		
41	平20	川田喜代子	大阪女子医学専門学校を卒業後、耳鼻咽喉科を専攻、昭和28年大阪市にて耳鼻咽喉科医院を開業の傍ら岐阜大学医学部で研鑽を積み医学博士の学位を取得。これまで女性として初めての大阪市浪速区医師会理事・大阪府女医会会長・日本女医会役員・大阪府人事委員会委員などに就任。これらの活動を通じて女性の地位向上に力を尽くした。また長年に亘る医師会・日本女医会を始め地域医療へ貢献した。	溝口昌子	昭和39年東京大学医学部を卒業後、皮膚科学を専攻、同大学大学院に進み、昭和45年には紐育州立大学に留学され帰国後には帝京大学皮膚科助教授を経て平成3年には聖マリアンナ大学皮膚科主任教授に就任。 平成16年には国際色素細胞学会連合の最高賞マイロン・ゴードン賞を受賞。長年に亘りたゆまぬ研究を続けてきた。
42	平21	青井禮子	東京医科歯科大学医学部を卒業後、内科学を専攻。昭和63年に日本女医会理事に就任。東京都医師会理事、日本医師会常任理事、母校の老年内科教授、葛飾区医師会長等を歴任し、多分野に亘り意欲的に活動をしてきた。幅広く社会に貢献し、日本女医会に貢献をした。	酒井シヅ	三重大学医学部を卒業後、東京大学大学院に学び、医学史研究の道に進み、昭和59年に順天堂大学医学部教授に就任。日本における医学史研究の第一人者として世界的に活動している。 「日本女医会百年史」編纂にも多大な貢献をした。
43	平22	中山年子	昭和26年東京女子医学専門学校を卒業後、武蔵野赤十字病院産婦人科勤務を経て昭和34年東京中野区に中山レディースクリニックを開業。地域医療に貢献すると共に40年に亘り島田養育センターの重症障害児やサリドマイド児の支援を続けてきた。さらに日本女医会東京都支部連合会長として、本会の発展に大いに貢献した。	後藤節子	昭和44年名古屋大学医学部卒業後、同大学産婦人科学教室にて絨毛がん腫瘍マーカーHCGの特異的モノクローナル抗体によるHCG微量測定法開発を始め、転移巣手術適応基準設定など世界が注目する絨毛がんの診断・治療法を確立した。さらに同大学医療技術短期大学部・医学部保健学科教授として看護師・助産師育成に貢献した。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
44	平 23	橋川ふさ子	昭和24年名古屋市立高等医学専門学校後眼科学を専攻、医学博士を取得御には、名古屋市交通局病院勤務を経て、昭和37年に橋川医院を設立。地域医療に邁進し、学校医等の貢献により、名古屋市教育委員会賞が授与された。昭和40年に日本女医会愛知県支部理事に就任以降40年以上に亘り支部・本部理事ならびに日本女医会副会長として活躍。特に阪神大震災時の医療活動、国際女医会議日本開催に尽力した。	安達 知子	昭和53年東京女子医科大学医学部卒業後産婦人科学を専攻、生殖・周産期のホルモン産生と代謝および静脈血栓塞栓症の研究において成果をあげる。平成16年愛育病院産婦人科部長平成18年東京女子医科大学客員教授就任後も研究とともに女性のリプロダクティブヘルス推進および国と自治体に関わる多数の重要な役職を兼ねる。
				小田 泰子	昭和34年北海道大学医学部卒業後眼科学を専攻、昭和43年に仙台で開業。地域医療とともに東北大学大学院国際文化研究科で医学の歴史を研究し、平成10年に国際文化博士号第一号を取得した。日本眼科医会・医師会の役員をはじめ日本女医会会長を歴任。「種痘法に見る医の倫理」「医師へボンとその時代」「スペイン風邪流行とその時代」などの著書を刊行した。
				清島真理子	昭和55年岐阜大学医学部卒業後皮膚科学を先行、上皮ケラチンの研究において国内外で成果をあげる。平成21年に岐阜大学大学院医学系研究科皮膚病態学教授就任後は疥癬のアフェレンス治療のメカニズム研究臨床応用に邁進、国内外で高く評価される。また女性医師・女子医学生の指導および女性医師就労支援にも貢献している。
45	平 24	該当者なし			
46	平 25			市田 露子	昭和五十二年新潟大学医学部を卒業後、国内外の医療機関において小児循環器領域の研究・臨床に多大な成果をあげ、特に心筋緻密化障害の原因遺伝子の報告は国内外で高く評価された。さらに先天性心疾患児の精神神経発達研究の我が国のパイオニアとして、国際共同研究を推進する一方、日本循環器学会男女共同参画推進や、富山大学小児科教授・女性医師支援室長として女性医師・女子医学生の指導に貢献した。

回数	受賞年度	社会に貢献した会員	業績内容	医学に貢献した会員	業績内容
47	平26	岩本絹子	昭和四十八年東京女子医科大学を卒業後、産婦人科医として長年にわたり地域医師会や日本産婦人科学会において地域医療と女性医師の地位向上に多大な貢献をした。また近年は医学生への支援や吉岡彌生先生の縁の地などの整備にもご尽力している。	野村芳子	昭和四十一年横浜市立大学医学部を卒業後、長年にわたり国内外の医療機関において小児神経学域の臨床・研究に多大な成果をあげ、特に小児不随意運動症に関しては世界の第一人者の一人として高く評価されている。
48	平27	黒崎伸子	昭和五十六年長崎大学医学部を卒業後長年亘り国内外の医療機関において外科・小児外科の臨床・研究・教育に多大な成果をあげ、平成二十二年長崎県西彼杵郡にて医院を開業、地域医療に貢献した。また、アジア・アフリカ・中東に於いて活躍の後、平成二十二年から五年間国境なき医師団医師団日本女医会の会長・国際総会日本代表として多大な貢献をした。		
49	平28	生野照子	昭和44年に大阪市立大学医学部を卒業後、小児科学および心身医学の臨床現場で広く研鑽を積み、この経験を生かし、平成元年からは神戸女学院大学人間科学部教授として青少年の心身問題、特に若い女性の摂食障害に取り組む。患者会および患者家族会を設立、長きにわたり摂食障害の現場に寄り添い、平成28年には一般社団法人日本摂食障害協会を設立するなど、多大な社会貢献とその功績が評され授賞が決定した。		